

モンゴルを訪ねて

2002年3月6、7日に開催された国際会議「北東アジアにおける経済協力のファクター」に参加するため、モンゴルの首都ウランバートルを訪れた。私にとって、これが初めてのモンゴル訪問であった。

ここでは、ウランバートルで行なわれた国際会議とそこで体験したいいくつかの出来事を紹介したい。

国際会議

3月6、7日の2日間にわたって、ウランバートル市内にあるモンゴル外務省の会議室で、北東アジアの地域間協力を政治、安全保障、インフラといった観点から捉え、議論するための国際会議が開催された。モンゴル開発研究センター(Mongolian Development Research Center)によって主催されたこの会議(協力: 笹川平和財団)には、モンゴル、ロシア、中国、韓国、日本の研究者に加え、モンゴル政府高官、UNDP等の国際機関からの参加者を合わせ、約60名が集まった。

この会議には三つのセッションが設けられ、モンゴル語・英語の二ヶ国語同時通訳で進行された。

第1セッションは「北東アジア経済協力における政治および安全保障」をテーマとし、モンゴル貿易産業・通商大臣チミドルジーン・ガンゾリク氏が最近のモンゴルの経済状況と北東アジアにおける経済協力に関する基調報告を行なった後、5名が発表を行った。

モンゴル持続可能発展議会のダグワドルジ教授は、まず、国連環境計画(UNEP)推進の下、海洋環境保全を目的に、日本、中国、韓国、ロシアの4ヶ国が合意したNOWPAP(North-West Pacific Region Action Plan: 北西太平洋地域海行動計画)や、中国・ロシア・朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)の3カ国に跨る図們江流域付近の地域を多国間の協力により開発しようとするプロジェクトであるTRADP(Tumen River Area Development Programme: 図們江地域開発計画)をはじめとする持続可能な発展に向けた北東アジア経済協力の既存のメカニズムを概説した後、それらをそのゴールに向けて如何に実現していくべき

かということについて四つのステップがあると述べた。第1段階はモチベーション（動機付け）で、北東アジアのすべての国が地域間協力によって、利益を得ることができることを認識することである。第2段階は形成期であり、特に政治面での協力の枠組みの形成が望まれる。第3段階は推進期で、少なくともある一国、あるいは一機関がイニシアチブをとってこの概念を推進していく必要がある。この点では、経済力のある日本が推進役となることの重要性が指摘された。第4段階は合意を得ることである。ASEAN+3、あるいはASEAN地域フォーラムの枠組みの中で、北東アジアの政治、安全保障、経済面に関する議論を行い、各国間の合意を得ることがベストであると述べた。

また、モンゴル国立大学のオトゴンバートル氏も同様に、ASEAN+3の枠組みを利用することが望ましいと述べた。さらに、同氏は北東アジア経済協力においては、政治的側面、安全保障的側面から、朝鮮半島問題が鍵となっていることを強調した。加えて、北東アジア各国の代表が集まり、経済協力に向けた各テーマで議論をする場を持つことが重要であり、その意味で東西センターが開催している北東アジア経済フォーラム、新潟県・新潟市・ERINAなどが主催している北東アジア経済会議の役割は大きいと評価した。その他、ロシア、中国の代表者が北東アジア地域の協力における各国の政策や取り組みについて報告を行った。

第2セッションでは「北東アジア経済協力における経済的、構造的要素」をテーマに7名から報告がなされた。特にモンゴルに焦点を当て、モンゴルと中国、モンゴルとロシアの協力関係についての報告が相次いだ。ここでは、モンゴル東部地域と中国内モンゴルの興安盟との協力について紹介する。

このテーマで報告を行ったのは、中国内モンゴル自治区東北アジア研究所副所長那順氏とモンゴルインフラ省エネルギー局局长スフバートル氏であった。モンゴルと中国の間には地理的にも産業的にも経済協力を行うための基礎的条件が整っている。こうした中で、両国が一層経済協力関係を強めていくための協力的分野としては、輸送、エネルギー資源、牧畜、観光などが挙げられる。また、両国国境地域の開発も重要なテーマである。各分野での個別のプロジェクトを積み上げることで、一連の両国・両地域の協力関係を築いていく方法が望ましいことが強調された。

輸送分野のプロジェクトとしては、チョイバルサンとイルシ間の鉄道・道路の接続が挙げられた。モンゴルが図們江地域の港湾を利用できるようになれば、モンゴルと中国との距離はもちろん、世界との距離も大きく短縮できる。これについては、両氏から「内モンゴル自治区のイルシか

らタムサクグラグまでの鉄道建設が近く始まる模様である」、「両地域の国境までの道路の整備と国境にある川に橋を架けるプロジェクトを早急に進めることが必要」などのコメントが寄せられた。あわせて、モンゴルと中国は既にウランバートルから北京までの高速道路の建設に合意していると報告された。

エネルギー資源については、モンゴル東部は地下資源の宝庫であり、チョイバルサンにはモンゴルの六つの石炭火力発電所の一つがある。一方、急激な発展を遂げている中国ではエネルギー資源の需要も急速に拡大している。モンゴルにとって中国は巨大な市場であり、資源開発は両国に利益をもたらすプロジェクトであると言える。

牧畜については、モンゴルは中国の加工技術を取り入れ、また中国の市場、販売ネットワークを利用したい考えである。

また、国境地域の開発のためには、人や物の交流が活発化することが重要であり、そのためには、鉄道・道路の接続とあわせて国境税関を認可し、整備することが重要である。次の段階として、国境地域に自由貿易区などを設けて、交流を促進させることが望まれる。現在、中国は沿海部やロシアとの国境付近等に輸出加工区や保税區、自由貿易区などを設置しているがモンゴルとの国境にはまだ一つも設置されていない。この点で、中国は現在二连浩特とザミンウドに自由貿易区を設けることを検討していると報告された。

モンゴルと中国、特にモンゴル東部地域と中国内モンゴル自治区との協力については、ERINAでもテーマの一つとして取り組んでいく必要がある。

第3セッションでは「北東アジア経済協力におけるインフラ問題」をテーマに6名が報告した。筆者はこのセッションで、「北東アジアにおける9本の輸送回廊」について報告した。経済発展のためには、国際貿易の興隆が必要であり、これに伴う国際輸送の活発化に適切に対処していく必要があること、自由で効率的な人の移動、物の輸送が、地域の相互の連携と協調による発展のために最も基礎的な要件であることを述べ、北東アジア地域の国際輸送ルートの現状と課題、今後の展望を報告した。内陸国モンゴルにとって、隣国、そして世界と貿易を行い、経済発展を図っていく上で、輸送という側面は非常に重要である。

モンゴルと中国の報告者からはモンゴルが現在進めているミレニアムロードについての説明や中国との連結に向けた進捗状況などが報告された。特にモンゴル東部の鉄道については、チョイバルサンとイルシが連結することにより、中国を通じて陸路でロシア極東港湾、北朝鮮港湾へ至るこ

とができ、モンゴルは海への出口を確保することができる。モンゴル東部から図們江地域へ至るルートの早期開通の必要性が強調され、現在両国が実現に向けて動き出していることが報告された。これにさらに朝鮮半島縦断鉄道が開通すれば、輸送ネットワークはさらに拡大するとし、こうした輸送ネットワークの拡大に向けた、政治環境の整備や信頼関係の構築の重要性が述べられた。

インフラ面では、輸送インフラだけではなく、知的インフラ面での報告もなされた。これは、Mongolian Academy of Scienceのバートル氏の北東アジアの経済協力においては研究者間のネットワークの構築と強化が必要であるというものである。政府・民間を問わず、ウラジオストク、ソウル、ウランバートル、吉林省、平壤の研究機関と大学を組み入れたネットワークを設立すべきであり、そのネットワークの調整・促進機関としてはERINAが望ましいとするものであった。

広大な空間を持つ内陸国モンゴルの安定した発展のためには、隣接するロシアおよび中国との円滑な通商、貿易、投資、交通、産業協力関係なくしては困難である。そのため、モンゴルは北東アジア諸国との交流と協力関係の構築・強化を強く求めている。そして、そうした動きが北東アジアの協力関係を二国間から多国間へと拡大していく。北東アジアの将来の安定的な発展のためにモンゴルが果たすべき役割は大きいことを改めて感じた会議であった。

余談であるが、この会議で同時通訳を担当していた女性は非常に優秀であった。彼女がたった1人で2日間にわたる会議を全て通訳したのである。我々が会議を行なうときには、同時通訳であれば3名体制をとるのが通常である。それを1人でこなし、またその通訳のレベルもかなり高かった。しかも、ロシアからの代表者が途中から英語ではなく、ロシア語で話し始めても、あせる素振りも無く、そのロシア語を実に滑らかに英語に翻訳していった。数人が驚いて彼女に目をやると、彼女はにっこりと微笑んで、ピースサインを返してくれた。ものすごい人があるものである。



写真1 国際会議「北東アジアにおける経済協力のファクター」参加者

ゴビ (GOBI) カシミア加工工場

会議の合間を縫って、ウランバートル市にあるゴビカシミア加工工場を訪問した。カシミアは銅と並ぶモンゴル最大の輸出品であり、その中でこの工場がモンゴル最大の規模を誇る。

ウランバートル市街から数分車で走ったところにあるこの工場は1981年に日本の援助によって設立された。これは、日本とモンゴルが国交を樹立(1972年)以来、最初の援助案件である。

工場の従業員は約2,000名に上り、その8割を女性が占める。セーター、カーディガン、毛布などの製品が生産されている。主に、アジア、欧米諸国に輸出されている。工場の脇に直売所が設けられており、観光客が買い物に訪れていた。工場では、洗毛、選別、染色、織機、縫製などの行程を順を追って見学させてもらった。徐々に製品が出来上がっていく様子は実に興味深かった。

ただし、最近ではカシミアの原毛を中国(内モンゴル自治区)の業者に高値で買われ、資金的問題で大量に高価なカシミア原毛を買い取ることができないモンゴルのカシミア加工工場は、工場の稼働率が低下しているという。実際、訪問時に稼働していないラインもいくつか見受けられた。



写真2 ゴビカシミア工場の様子

ゲルを訪ねて

会議終了後の8日に、希望者を募って冬のモンゴル視察ツアーが組まれた。このツアーの主な目的はゲルを訪問することであった。

ウランバートル市内から車で10分ほど走ると突然平原が広がる。今年は暖冬と言うこともあってか、3月はじめてあっても一面の銀世界というよりも所々から茶色い地面が覗いていた。その中をさらに1時間ほど進むと、舗装道路は途切れ、平原の真っ只中を走ることになる。広い平原ではあるが、走る場所は決まっている様子で、轍の跡をなぞるように進む。その道は必ずしも状態が良いわけではない

が、草原を保護する意味でも決められた道を走ることになっていると言う。

ウランバートル市内のホテルを出発してから1時間半ほどで三つのゲルが集まっている場所に到着した。車を降りると、遠くにたくさんの羊や山羊の群れが見受けられた。ゲルの前には馬が3頭つなわれ、後ろには家畜小屋があった。

ゲルの中は想像以上に暖かくて驚いた。この日は風が強く、外は零下15度程度に冷え込んでいたため、ゲルの中の暖かさが心地良かった。入り口のそばにはその日生まれたばかりと言う山羊の赤ちゃんが寝そべっていた。三つあるベッドの一つに腰掛けるとすぐに嗅ぎタバコが回され、馬乳酒がふるまわれる。ゲルの主が「今日は新しい命の誕生もあったし、新しい外国の友達もできた。今年に入ってからはまだ1頭も馬が死んでいないし、羊や山羊も大きな問題がない。家族もみんな元気でやっている。今年はきっといい年になる」と嬉しそうに挨拶をしたのがとても印象的であった。

モンゴルでは過去2年間連続で深刻な雪害に見舞われた。これによって死亡した家畜は昨年だけでも600万頭に上る。そうした辛い経験があった中で、今年はまだ馬が1頭も死んでいないというのはどんなに嬉しいことだろうと想像した。



写真3 ゲルの中の様子

その他雑感

先にロシアと中国を訪れたことがあるためか、モンゴルにはロシアと中国の雰囲気少しずつ漂っているように感じられた。ロシア風の街のつくりと建物の中に時々中国風の建物が覗く。街の看板などは、ロシア文字であるが、街行く人はロシア人というよりも日本人や中国人に近い。デパートの様子は中国のそれと非常に良く似ている。食事の最初に出てくるサラダはロシアで頂いたものと良く似ている一方、最後の方に登場するポーズと呼ばれる羊肉を小麦

粉の皮で包んだものは、まさに中国の小籠包である。文化がうまく融合しているように感じられた。

また、今回会議に出席していた中国の方がモンゴルの方々と会話をしている姿を見て、考えてみれば当然のことであるが、中国のモンゴル族の方はモンゴル語が話せるのだと言うことを改めて実感した。また、ロシアからの参加者とロシア語で話をするモンゴル人の姿も多く見受けられた。加えて、英語を話す人が非常に多いように感じた。北東アジアにおいては時に言葉の問題が障害となる場合がある。そうした中、モンゴルにはモンゴル語はもちろん、ロシア語、英語をあやつる事ができる人が多い。この意味で、モンゴルは最も交流しやすく、協力関係を築きやすい国なのかもしれないと感じられた。

わずか数日の滞在であったが、モンゴルはとても魅力的な国に思えた。次は、夏に、ウランバートル市以外の地域も訪れてみたい。4月22日から、大阪～ウランバートル便に加え、成田～ウランバートル便が就航した。これにより、また一步、モンゴルが近くなった。

(ERINA調査研究部研究員 川村和美)



写真4 このゲルで暮らす子供たち